第五回　南島学ライブトーク　　「肥やしのチカラ」

２月２６日（土）　　午後３時　　ギャラリー・ガラ
小田急線　梅ヶ丘駅下車　徒歩二分
講師：堀充宏（葛飾区郷土と天文の博物館）

堀さんたちが企画した「肥やしのチカラ」展が葛飾区郷土と天文の博物館で開かれたのは二〇〇五年である。その特別展の展示図録には以下の章立てがある。

第一章　江戸から肥やしがやってきた
第二章　肥やしの近代
第三章　肥やしが拓く　未来を拓く
特別寄稿　清潔不潔の前近代
となっている。一部を引用してみよう。

第一章　〈江戸から肥やしがやってきた〉

江戸の町から排出される人糞尿は周辺の農村で肥料として使われていた。これを売買するようになったのは享保時代（１７１６～１７３５）ころからである。都市か形成されるとともに人糞尿の処理は江戸も町にとって大きな都市問題であった。

人糞尿を肥料として利用するということは農業問題でもあり都市問題でもあった。この章ではまず農業問題として江戸（東京）の下肥の農村還元について考えてみたい。下肥は都市と農村をつなぐ、と一般にいわれているが、下肥自体は人糞尿に過ぎなく、それをどのように流通させ、活用させ、農村の生活を豊かにさせていったのかが問題であろう。

江戸の町は農村によって取りまかれているが、本書ではおもに東京東郊の農村が主題である。現在に江戸川区、葛飾区、足立区、三郷市、八潮市、越谷市、草加市あたりがそれである。これらの地域は利根川の堆積作用によって形成された低地の農村であり、大小の河川や用水が縦横に行く水郷的な景観を持っていた。こうした環境を考え合わせながら江戸から昭和にかけての下肥利用のあり方を史料と下肥を実際に扱った人たちから聞き書きによって見ていきたい。

以上の文章からも分かることだが、堀さんたちは足を使って、下肥の流通を追っている。実際に流通に従事した人たちからの聞き書きも豊富である。江戸東郊の暮らしを知る貴重な仕事といえる。ライブトーク当日の話は、また別の側面も聞けることと思う。いまから楽しみである。